

「ミルクと蜂蜜の国」へ移住するということ
米国・メリーランド州に住む
ギクユ人移民の語りの記録

石 井 洋 子

Experience of Immigration from Central Kenya to the United States: The “Land of Milk and Honey”

African immigrants in the United States has been growing since 1960. The Kenyan population has also increased dramatically over the last 20 years, and Maryland is home to a concentration of Gikuyu immigrants, who comprise the largest ethnic group in Kenya. However, very few social cultural research has thus far been conducted on this group. As an anthropologist, I interviewed 102 Gikuyu immigrants from 2015 to 2016.

The purpose of this paper is to share Gikuyu stories of immigration. Most Gikuyu people started to immigrate in the mid-1990s, dreaming of their new lives in the United States. The main reason for immigrating was to obtain better education and seek better lives. As there were only six major universities in Kenya, young people decided to study in the land of Milk and Honey, namely the United States. In addition, the Kenyan economy in the 1990s was very slow; thus, many people applied for a Green Card to relocate to the United States, this based on Kenyans' positive image of the country. Sharing their stories of immigration sheds light on the driving force of their social dynamics.

はじめに

本稿の目的は、アメリカ・メリーランド州に居住しているケニア共和国出身のギクユ人移民¹の「移住をめぐる語り」を記録することである。

アメリカ合衆国には現在、非常に多くのアフリカ大陸出身の移民が住んでおり、アフリカ諸国が植民地から次々に独立した「アフリカの年（1960年）」から、その数は増えている。筆者の調査地であるケニア共和国からの移民は1990年代以降に急増しているが、ケニア人移民に関する社会・文化的側面を調査した報告は少ない（Odera 2010；Kioko 2007, 2010）。とくに、移民がどのような思いで祖国を離れ、1万キロ以上も離れた新たな地で次の人生を歩み出したかという理由は、社会動態の原動力を知る重要な情報であるが、そうした個人人のストーリーを中心に取上げた報告は見あたらない。これまで、アフリカのような低開発地域から、ヨーロッパやアメリカなどへ渡った移民は、学のない貧しい出稼ぎ労働者をイメージさせたが、筆者が出会った人びとの多くは、高学歴で向学心が強い人びとであった。そしてアメリカという豊かな国、つまりギクユ語で表現するところの「ミルクと蜂蜜の国 (*būrūri wa iria na ūki*)」へ移住することに強い憧れを持ちつつ、さまざまな思いでアメリカでの生活を開始していた。

筆者は、2015年4月から2016年3月までの11ヶ月間、メリーランド州においてギクユ人移民を対象とするフィールドワークを実施し、彼・彼女らが経験した「移住」という出来事について、多くの語りを集めることができた。これらの語りはギクユ人に特化したもの



資料1：フィールドの位置，メリーランド州ボルチモア（筆者作成）

¹ ギクユ人 (Gikuyu) とは、ケニア最大の民族集団であり、バントゥー語系言語のギクユ語を母語とする人びとである。筆者は1995年以来、ギクユ人に関する人類学的研究を実施してきた。なお、ここで述べる移民とは、20世紀に入ってから自分の意志で移住した人びとを指している。

だが、比較研究としてケニアの異民族の人びと（ルオ人、グシイ人、カンバ人、メル人）にも話を聞いた結果、大きな違いは見られなかった。本稿では、多く聞かれた特徴的な語りの幾つかを素材として提示することを目的とし、ほとんど理解されてこなかったケニア人移住史の側面を明らかにしたい。

そもそも、在米ケニア人はテキサスやジョージア、ワシントンやニュージャージ、メリーランド州などに集住しているが、筆者がメリーランド州へ向かった理由は、ケニアで世話になっているギクユ人家族の長女が2000年にメリーランド州へ移住し、その後も交流が続いたからである。メリーランド州には、1960年代後半と70年代初頭に同州の大学で教鞭をとり始めたギクユ人教員2人が、次々と家族や友人、同郷の人を呼び寄せたことからギクユ人人口が増えている。その多くの人たちの出身地であるムランガ・カウンティは、ケニアの首都ナイロビの北東に位置し、人口密度が高い肥沃な地域で土地細分化が激しい。以下に紹介する語り手の多くは、土地資源が希少になりつつある地域から来た人びとであると理解できるだろう。

フィールドワーク

まず、フィールドワークの手法について説明したい。調査の方法はインタビューと参与観察であり、筆者が話を伺ったのは、主としてメリーランド州の都市ボルチモアの郊外に居住している、在米5年以上のギクユ人移民第一世代102人²であった。これらの人びとへのアプローチとしては、雪だるま式に紹介してもらったり、ケニア人の葬式や結婚式、ベビーシャワーや誕生日会など、毎週末のように行われるイベントで会った人にインタビューを受けてもらえるように直接頼んだりした。インタビューを行う場所は、対象者の自宅である場合が多かったが、場合によっては学校や職

² インタビューを行った102人の中には、ギクユ人第一世代の他に、視野を広げるために13名の異民族と7名のギクユ人移民の子供が含まれている。

「ミルクと蜂蜜の国」へ移住するという事米国・メリーランド州に住むギクユ人移民の語りの記録

場、カフェで会うこともあった。インタビューの倫理規定に従ったガイドラインを説明し、録音・撮影の許可を取って聞き取りを行った。録音内容の書き起こしをした際、意味の不明瞭な部分は携帯電話のメッセージアプリケーションや、直接会って確認作業を行った。インタビューの時間は、平均で1時間半～2時間であったが、人によっては4時間も喋り続ける人もいた。

つづけて、ギクユ人移民の概要に触れておきたい。詳細は別稿に記述する予定だが、メリーランド州に住むギクユ人移民の大多数は、1990年代半ばから2000年代半ばに留学生として渡米した人びとであり、現在の年齢は30代～40代である。当初は男性が多かったが、次第に女性も増えてきた。その他、グリーンカード（永住権）に当選して家族と共に渡った人や、移民の家族として合流した人も増え、いまは3世代で住んでいる家族も少なくない。調査を行った半分以上の移民が大学以上の学歴を有しており、男性の職業の多くは看護師などの医療従事者であり、その他は教師、会社員、スモールビジネスのオーナーなどである。女性の職業もまた約6割が看護師であり、その他は教師、会社員などである。平均的な世帯年収は78,000ドルであり、アメリカ全体の平均年収が48,098ドル（2015年）³であるのに比べると、ギクユ人移民の収入は非常に高いと言える。もちろん、正しい年収を聞くのは難しく、故意に低く答えたり、高く答えたりする場合もあるが、夫婦の職種から判断する限り、誤差は大きくないと考える。

暗闇から明るい世界へ

ギクユ人移民がアメリカへ向かった背景には、何があるのだろうか。多くの移民が、90年代以降に渡米したと述べたが、筆者が出会ったパイオニアとも言うべき人びとは、ケニアがイギリス植民地政府から独立⁴した1960年代という早い時期に既にアメリカへ渡っていた。まずは、メリーラ

³ アメリカ社会保障局 (<https://www.ssa.gov/oact/cola/AWI.html>)

ンド州へ多くのギクユ人を呼び寄せたギクユ人大学教員（70代）と、子供のいないワシントン州シアトルのアメリカ人夫婦の世話になり高校に通った女性（70代）の語りを紹介しよう。後者の女性は、後にケニアへ帰国したが、メリーランド州に住む息子の嫁の出産にあわせて渡米し、筆者と会った。

1963年、ナイロビの郵便本局で働いていて、プエトリコにあるアメリカの大学から全額奨学金をもらって、プエルトリコへ学部留学した。卒業時、成績がアフリカ人留学生のなかで1番だったので、アメリカ・ジョージア州の大学から奨学金をもらって大学院に進んだ。そのとき、ケニア政府の奨学金でカナダに留学しないかと誘われたが、帰国して役人になるのは魅力的ではなかった。ケニア政府内の就職は、縁故採用が幅をきかせていて、同じ部族であれば、能力に関係なく良いポストに採用されていた。そんな中で自分の能力を潰したくなかった。メリーランド州へ来たのは偶然だった。1967年、友人を訪ねて遊びに来たけれど、友人は現れず電話も通じなかった。所持金は200ドルで、1泊7ドルのモーターに泊まった。ボルチモアの町を歩いていて、知っている名の大学に辿り着いた。美しい管理棟に入ってみたら、学長室から出てきた人が「あなたは外国から来た教員の方で、学長に会いに来たのですか？」と聞いてきた。「そうだ、学長に会いたい」と言ったところ、翌週の木曜日に面会の約束を取りつけてくれた。学長はケニアへ旅行したこともあり、自分の事を気に入ってくれ、教員として雇ってくれた（男性・70代）。

1962年、アメリカに住んでいたイトコの仲立ちで、子供のいない白人夫婦の家に居候して、アメリカの高校に通わせてもらえることになった。その時、小学校まで片道15キロも歩いていたので、神が助けてく

⁴ ケニアは、1895年から1963年まで英領下にあった。

「ミルクと蜂蜜の国」へ移住するという事米国・メリーランド州に住むギクユ人移民の語りの記録

れたと喜んだ反面、アメリカへ行くのは怖かった。初めての外泊が飛行機の中。アメリカに到着したら変な人たち、変な食事、変な国。英語は勉強していたけれど、よく喋れなかった。結局、8年間半も帰れず、キョウダイ8人の賑やかな環境が恋しくて、最初の3年間はホームシックがひどく、食事もあり喉を通らなかった。(石井：60年代当時、人種差別はありましたか?) シアトルでの人種差別はひどかった。(世話になっていた)白人夫婦とレストランへ行ったことがあったが、私が黒人だったので、サービスを拒否された。もし、この白人夫婦が私を愛していなかったら、私をレストランへ連れて行かなかっただろう。学校では温かく受け入れられた。集まりがあれば、ケニアの話をして欲しいと頼まれ、色々と質問された。(石井：当時アメリカで盛り上がっていた公民権運動をどう見ましたか?) 私は運動の一部だった。集会などに参加しなかったが、ここに存在すること自体、運動の一部だ。例えば、髪の毛だ。それまでは、アフリカ人は白人のように髪をまっすぐにしたが、運動によって髪をナチュラル(アフロ)にし始めた。1970年にケニアへ一時帰国したとき、母は私の成長ぶりを見てとても喜んだ。あんなに小さな子供が、立派に成長したのはアメリカのお陰だと言って。アメリカは世界と繋がっているから、私を寛大な人間にしたと思う(女性・70代)。

この語り手たちのように、60年代に渡米したケニア人は数少ないが、大学の奨学金や私設の援助を得て渡航したり、ノーベル平和賞を受賞したケニア人女性のワンガリ・マータイのように、アメリカの公費留学制度(African Airlifts)⁵を利用したりしていた。しかし、70年代、80年代になると、比較的裕福なケニア人家庭の子供が私費で留学する機会が増える。その多くは卒業後、自国の発展や家業を継ぐためにケニアへ帰国しており、

⁵ 「エアリフト」と呼ばれる同制度は、1950年～60年代にジョン・F・ケネディーやキング牧師らアメリカ人が中心となり、アフリカ人学生のために創出した留学制度である。

アメリカに留まった人はほんの一部であった。

それでは、90年代以降に押し寄せた渡米者の背景は、どのようなものだろうか。あるギクユ人男性は、アメリカの大学から入学許可証（I-20）を取り寄せるのは簡単で、彼が乗ったボルチモア・ワシントン国際空港行きの飛行機には30人もの同胞が乗り合わせていたと回顧した。また、ケニア国内からの押し出し要因として、90年代のケニア経済が大不況であった事と、進学できる大学が少なかった事⁶を指摘した人が多かった。当時のケニア経済について筆者も多少は知っているが、大学を卒業しても就職口が見付からず、村でブラブラしている若い人達が多かった。学生であった筆者にでさえ、息子や娘の就職先を紹介して欲しいと懇願する親もいた。以下は、ナイロビ大学（ケニアで最も古く、優秀な大学の一つ）を卒業し、現在ボルチモアの公立高校で数学教師をしている男性（50代）の語りである。

ナイロビ大学を卒業した後、有名企業で働いていたが、社内の汚職行為が許せずに辞職して、1992年に電話の取り付け・販売業を開始した。しかし、ケニア経済は「ゴールデンバーグ事件⁷」で悪転し、1995年には不能状態に落ち込んでしまった。収入が全く無くなり、子供の学費が払えなくなった。政府役人は給料をもらっていたので分からなかったと思うが、民間セクターにいた人は、何かおかしいと気付いていた。私は、いつもクリーンな仕事をしたかったので、ドバイから電話機材を輸入する際、ナイロビの空港で要求される賄賂を決して渡さなかった。きちんと支払った税金のレシートを見せたが、それが気に入らなかつたらしい。彼らは、お構いなく私の持ち物を全て没収した。最悪の経験だ。私はとても怒って、失望した。二度とケニアへ戻らないという気持ちでアメリカへ渡り、メリーランド州の大学院へ進学し

⁶ 90年代のケニアには、ナイロビ大学やモイ大学、ケニヤッタ大学など6校程度しかなかった。

⁷ ケニアの財務大臣が絡んでいると言われる大規模な公金横領スキャンダル。

「ミルクと蜂蜜の国」へ移住するという事米国・メリーランド州に住むギクユ人移民の語りの記録
た。

小学生の時、家が貧しかったので一生懸命に勉強した。家畜を放牧する時も、算数の教科書を持って行った。一生懸命に勉強すれば、良い人生が待っていると信じてナイロビ大学に入ったが、その後は何も無かった（男性・50代）。

こうしたケニアの国内情勢に不満を抱いて母国を離れたギクユ人は少なくなく、ある60代の男性は、母村に有していた1000本のコーヒーの木からの収入は少なく、日雇労働による収入も不安定であったため、家族7人でアメリカへ移住する事を決意した。移住は決して簡単ではなく、査証申請費や健康診断書の発行、渡航費など大きな出費が伴ったが、ケニアに自分と家族の未来はないと見切りを付けて、母国を出て行ったのである。一方、若い世代の人びともまた、自分の未来を切り拓くためにアメリカへの留学を目指した。ケニアのケニヤッタ大学で教育学を学んだ男性（40代）は、留学の理由を以下のように語った。

私はエンジニアになりたかったが、（進学を決定する一斉テストの）成績が足りずに、ケニヤッタ大学の教育学専攻へ入学するしかなかった。私は行きたくなかったが、大学へ行けば良い就職口が見付かると親が言い張ったので、仕方なく、親の言うことを聞いた。

卒業（1998年）しても就職口はなく、アメリカの大学院へ行くことにした。その資金を集めるために、裕福な友人を持つ主賓を迎えてハランバー（募金集会）を行い、27才でニューオーリンズ大学への留学が叶った。（石井：学部からの留学は考えなかったのですか？）当時、セコンダリー・スクール⁸を卒業したての子供をアメリカへ送りたい親は少なかった。今でもそうだろう。まだ若いからドラッグに手を出した

⁸ ケニアでは、初等教育8年、中等教育4年、高等教育4年の教育制度を採用しており、セコンダリー・スクールとは、大学へ行く前の中等教育である。

り、酒に溺れたり、友達の車が羨ましくて仕事に明け暮れ、挙げ句の果てには大学を退学になる。親は子供に大学へ行って欲しいんだ（男性・40代）。

彼は現在、家族とメリーランド州に住んでいるが、2005年にニューオーリンズ市を襲った大型ハリケーン・カトリーナで罹災し、メリーランド州のギクユ人を頼って陸路を逃げてきた。その窮地を救ったギクユ人は高校時代の友人で、彼の家に2ヶ月間居候させてもらったそうだが、こうした部分でも、ギクユ人ネットワークが活かされている。彼のように、希望の進学が叶わなかったり、就職できなかったりした末に、アメリカ留学を目指した10代、20代の人たちは多かったが、同時に、子供を海外へ送り出すことに熱心な親もいたようだ。

その頃（90年代）、ナイロビ大学は教師のストライキや学生の暴動ばかりで、1年間も閉鎖された事があった。4年のコースが7年もかかったんだ。卒業生のイメージは悪く、就職口もなかったので、親たちは子供をアメリカへ送るのに躍起になっていた（夫婦・30代）。

私は、高校での成績が悪く、大学へ進学できなかった。責任感もなく、ナイロビで働いていたのに、月末には村に住む母に小遣いをもらいに行っていた（笑）。母は、そうした私がアメリカへ行けば、よい人生を送れると思ったらしい。母は看護師として、シカゴやボルチモアで研修を受けた経験があったからだ。2000年、YMCA（キリスト教青年会）の職員が、アメリカでのサマーキャンプに参加する人を探しており、私は400人のケニア人応募者の中から選ばれて渡米する事ができた。

このように、ケニアの親たちの多くもまた、アメリカに大きな期待を寄

「ミルクと蜂蜜の国」へ移住するという事米国・メリーランド州に住むギクユ人移民の語りの記録

せていたことが分かる。もちろん、ケニアはイギリスの植民地下にあったため、英国移住という選択肢もあったはずだが、少なくとも同時多発テロ事件（2001年9月11日）以前のアメリカはイギリスよりも自由があり、仕事をしやすいという理解が広まっていた⁹。ケニアから直接、アメリカへ渡った人以外に、外国からアメリカへ渡った人もいた。以下に紹介するのは、スペインからアメリカへ移動し、結果的にギクユ人の友人がいるメリーランド州へ向かったケースである。

1997年、アメリカ・ミズーリ州のセントルイス大学に願したら、スペインの分校から先に入学許可が下りたので、スペインへ行った。スペインで就労ビザを得るのは難しく、英語の家庭教師をしたり高級マンションでメイドをしたり、ベビーシッター、学内の仕事など、何でもした。図書館もよく利用した。それでも経済的に苦しくなり、カソリック教会の神父に「学校に通いたいが、とても困ってる。助けて欲しい」と頼んだら、修道院のシェルターに住まわせてくれた。そのシェルターは女性が逃げ込む場所で、夫に殺されそうになったアンゴラ出身の女性と子供、スーダンの戦争から逃れた女性などが住んでいた。平日は通学し、週末は修道院の掃除をしたり、シスターに頼まれた仕事をした。月に一度、教会から通学費や食糧をもらった。お金の工面がいよいよ難しくなり、アメリカの本校へ転校する名目で渡米し、友人のいるメリーランド州へやってきた。

ケニアでは貧乏だったが、とっても楽しく幸せだった。アフリカの子供は裸足でみすぼらしいけれど、素朴な事に沢山笑って、何の悩みも無くのんきだった。それが、このアメリカには無いんだ。アメリカにはお金はあるけれども、そういう底なしの喜びがない。（石井：ケニ

⁹ 渡航先として、イギリスだけでなく、ボツワナやジンバブエ、南アフリカやナミビア、インドなどの選択肢もあり得たが、ある30代の女性は「アメリカの選択肢があったら、全員がアメリカへ行ったと思う。アフリカはアフリカだ。」と述べた。また、インドは働きながら通学できないので、敬遠された。

アが恋しいのですか?) ケニアのコミュニティーが恋しい。定職に就いていない兄弟もいて、経済的には大変だけれど、そういう中でも満足感があるんだ(女性・30代)。

以上に見てきたように、90年代以降のアメリカへの留学は、母国での望みのない生活から抜け出す一つ的手段であり、人生を切り拓く道筋であった様子が分かる。学校の成績が良い学生や、渡航資金にアクセスすることができ、強い意志のある働き世代の人がアメリカ行きの夢を掴んだのである。しかしながら、誰もが渡米を良いことだと思っていたわけではない。家族にとって重要な長男がケニアを離れることに大反対した父親や、経済的に困窮した親族からの強い要請で、アメリカでの人生を強いられた若者のケースを紹介しよう。

兄がアメリカへ行くと言い出したとき、お父さんは凄く怒った。一番上の姉が16才で亡くなったので、余計に遠くへ行って欲しくなかった。お父さんはエンジニアでお金はあったから、「知り合いもいないアメリカに行くなんて、馬鹿げた考えはどこから来たんだ。お前は大事な長男なんだぞ。」と喧嘩になった。兄は、家を飛び出してアメリカへ行ってしまったけれど、とても苦労したらしい。4年間、電話一本もかけずに、ただ葉書で生きていとだけ伝えてきた。何かおかしいと思った。

あるとき、親が私の学費支払いに苦労している事をどこかで聞いたらしく、突然に兄は3万シリング(3.3万円程度)を送ってきた。私も兄を追いかけて渡米したが、その時も兄が渡航費用を意し、11年間も兄の家に居候させてもらった(女性・30代)。

オジの一人が、アメリカ留学を強く勧めてきた。高校の成績が、とても良かったんだ。けれど、「とてもウキウキした」とは言えない。村

「ミルクと蜂蜜の国」へ移住するという事米国・メリーランド州に住むギクユ人移民の語りの記録

での人付き合いが好きで、両親や祖父母などと楽しく過ごしていたから。ナイロビにキョウダイが二人住んでいるが、遊びに行っても1日で村に帰ってきたかった。村の小道で見知らぬ人にあっても、村について説明してあげるのは誇りに思った。ケニアの大学の入学許可をもらっていたので、エンジニアリングを勉強したかった。発展途上国には必要な仕事だ。

しかし、アメリカへ行くのは家族や拡大家族、村全体の希望だ。子供をアメリカへ送った親は誇りに思うし、貧乏から抜け出せると思っている。親が貧乏のままだと失敗したと思われるので、親からの（お金を送って欲しいという）頼みを、無視できない。「アメリカへ行きたくない」と言えるような状況ではなかった。私のアメリカ留学を、両親はとても喜んだ（男性・20代）。

前者のように、親の反対を押し切って渡航した男性や経済的に苦しい家族は、すでに渡米した家族や親族から送金してもらうか、ハランベ（*harambee*）¹⁰と呼ばれる募金集会を行って、地元の人々や家族、親族から渡航資金を援助してもらうしかない。人びとの生活が困窮した90年代に募金を行い、渡航費と学費の一部を捻出するのは大変だったであろうが、なけなしの金をはたいて、この若者をアメリカへ送り届けようと皆で努力したのである。実はその後、そのお陰で渡米できた人は、地元の人々や家族からの要求、つまりキョウダイの学費や家族の医療費、葬式の香典や結婚式の祝儀、教会の改築費など、度重なる金銭的な要求に困り果てることになるが、ギクユ人社会に流布していたアメリカへの良いイメージ、とくにアメリカは仕事で溢れ、お金は「道で拾うように」簡単に手に入ると皆が信じていたことを思えば、仕方がないのだという。ケニア人が共有して

¹⁰ ハランベとは、ケニア初代大統領のジョモ・ケニヤッタが独立後にケニアを建国していく上で人びとを鼓舞した「皆で一緒にひっぱりあげよう」という意味のスワヒリ語のスローガンである。

いたアメリカの憧憬については、以下の語りからも明らかである。

私たちは、アメリカのことを、映画やテレビ、小説などで良く知ってる。私が読んだ小説では、アメリカ人は家から車に乗って悠々とハイウェイを走り、その生活はとてもシンプルに描かれていた。映画の中のアメリカは、とても美しかった。この場所に行きたいと本当に思った(男性・40代)。

子供のとき、「炎のテキサス・レンジャー」「反逆のヒーロー・レネゲイド」といったアメリカのテレビドラマを良く見た。学校の友達と喋る話題は、アメリカの文化ばかりで、自分の国のことには興味なかった。しかし、実際にこちらに来て、映画とは違うんだと思った。テレビでは、アメリカで一生懸命に働いて、あがいている様子は見えない。貧しい地域など、全く見えないんだ(男性・20代¹¹)。

村に住んでいたとき、ある貧しい家族の1人がアメリカへ行った。すると、その家の子供が教室に現れるようになり、その子の家も改築されてきれいになり、とても驚いた。私もアメリカへ行ったら、こういう事ができると思った(女性・40代)。

これらの親米的な好印象は、筆者がインタビューをしたほぼ全員が共有していたと言っても過言では無い。アメリカはとても豊かな国で、病気がない。ケニアで目にするアメリカからの援助物資のように、服は無料で配られると、多くの人が思っていたという。こうした夢の国へ向かうかのような期待が、ギクユ人移民の渡航を力強く後押ししていったと言える。

¹¹ 20代の彼は、10才の時に親に連れられて渡米した移民1.5世である。

失望・孤独・カルチャーショック

暗闇から明るい世界へ向かったギクユ人移民が経験したのは、大きなカルチャーショックであった。ある女性（40代）は、「空港からイトコの車でボルチモアのダウンタウンを通ったとき、映画とは全く違っていて驚いた」と筆者に語ったように、映画のような美しい風景はどこにも見当たらず、失望している。さらに、アメリカ英語がよく分からず、お金も足りず、心細い思いをしている。兄のもとに身を寄せた40代の女性もまた、ひどいホームシックにかかり、2年間ほどふさぎ込んだという。

それでは、ギクユ人移民は、どのようにアメリカでの生活を開始したのだろうか。ケニアでは、例えば農村から首都ナイロビへ出稼ぎに出るときに親戚や同郷の人、友人などの家へ押しかけて、居候する事が普通に行われるが、メリーランド州へ向かった人も同じように、ケニア人に世話になることを期待して出掛けていった。90年代は、携帯電話もインターネットも一般的ではなかったので、事前連絡もなく先に渡米したケニア人宅へ突然に押しかけて驚かせる事もあったというが、同居を拒否されることは希で、多くの場合において半年～1年間半、居候させてもらっていた。以下、アメリカでの第一歩がどのように開始されたのか、その語りを紹介する。

1991年に留学生として渡米した。アメリカに知り合いは誰一人おらず心細かったが、ボルチモアの空港でケニア人男性が自分の方に近づいてきた。少し話をして、一緒に駐車場へ向かった。彼は、私の車が駐車場にあるのだと思ったのだろう。彼の車のトランクに私の荷物も入れて、勝手に乗り込んだ。とてもいい人で、私を追い払わなかった。家に着いて座ったが、何も尋ねなかった。

翌日、正直に自分の状況を伝えると、彼はケニア人学生が沢山住んでいる彼の家に連れて行ってくれた。そして、大きなリビングの一角を

カーテンで仕切り、私の居場所を作ってくれた。あとは、リサイクルショップでマットレスを買ってくればいだけだ。アメリカの生活は、こうして始まった（男性・50代）。

ボルチモアで仕事を始めていたが、ある時、見知らぬケニア人から電話があって「2人なのだけれど、泊めて欲しい」と言われた。彼らは、ある会議に出席するためにアメリカに来ていて、帰国するまでの数日間、宿泊場所が無いのだという。ホテルで会って話をし、泊めることに同意した。彼らは、ただ電話帳でギクユ人の名前を探して、電話をしてきたんだ（男性・60代）。

アメリカに来て、同郷の幼なじみの家に5ヶ月間、住まわせてもらった。ケニア人が皆、優しいわけではない。私は仕事が無く、夫はボルチモアの駐車場でアルバイトをしていただけど、自分たちの食糧は自分で買い、月の終わりには部屋代として500ドルを払うように言われた。彼女の子供のベビーシッターもやらされた。アパート探しも手伝ってくれなかった（女性・40代）。

1996年、アメリカの空港に降り立った私は、親からもらった175ドルしか持っていなかった。しかし、そのお金は3日後に銃を突きつけられて奪われた。外国でお金も無く、どうすればいいんだ。「ミルクと蜂蜜の国」で飢えそうになった（笑）。自分を世話してくれるはずの同郷の人は、空港で私を拾ってケニア人が10人もいる家に落として立ち去ってしまった（男性・40代）。

通常、ギクユ人移民は、先に渡米したキョウダイやイトコの家に住候し、アルバイトを紹介してもらって車を買って、何とか独り立ちできるようになったら家を出て行く。上記の語りのように、血縁者ではないホストとの

出合いは、必ずしも良い経験ばかりではなかったようだが、同じ民族、もしくはケニア人のネットワークがたぐり寄せられて、直接知らなかった人に何ヶ月も世話になる場合も少なくなかった。ホスト側にとっても、同じケニア人を助けることは故郷への恩返しでもあり、当然のことなのである。このように、同胞の直接的な援助を得てアメリカでの生活を開始したわけだが、その後の生活は決して楽ではない。正規の学生として勉強しながら、生活費と学費を稼がなければならないのである。睡眠時間を削って仕事を幾つも抱え、なおかつ奨学金を得るために良い成績を維持するのは、大変な努力が必要である。多くの人が「人生で最も辛い時期」と述べていたが、以下の語りで、渡米直後の大変な生活の様子が分かる。

私は、1996年にメリーランド州へ来た。皿洗いとして時給4ドル25セントで16～17時間働いて、大学にも通った。その少ない時給で、大学の学費や生活費、ケニアのキョウダイの学費も捻出する必要がある、大学を卒業するのに10年かかった。

当時、文章を書くのがうまかったから、ナイジェリア人学生の大学のレポートを代わりに幾つも書いてあげたら、学期の終わりに、700ドルの車を買ってくれた。大学はワシントンDCにあり、車で1時間ぐらいかかる。早朝5時にスーパーに行くと、DC行きのバスを待ってる人がいるので、その人達を5ドルで乗せてあげてガソリン代にした。けれども、とても危ない仕事だ。私の喋りになまり（アクセント）があると分かった、「ちょっと待って今払うから」と言って、逃げてしまう人もいた。銃を突きつけられて、運転させられた事もあった。このときが、人生で一番つらい時期だった（男性・40代）。

2002年、兄を追いかけてアメリカに来た。兄がアメリカ生活は大変だと言ったが、冗談だと思っていた。彼は良い車を持っていたし、お金や格好いい服も送ってくれていたから。アメリカは天国のような所だ

ろうと信じていた。

アメリカでの仕事は、とても忙しかった。朝8時半から13時半まで大学の授業を受けた後、コンビニで14時から22時まで働き、精神障害者の施設で23時から朝7時まで付き添いの仕事をした。(石井:横になって休む時間がありませんね)夜の仕事は、椅子に座りながらうたた寝して良いんだ。学費を払い続けないと、学校を退学になり、入管に強制送還される。忙しく動き回するには車が必要になる。私は兄がいたから、だいぶ助かった(男性・30代)。

上記の2人のように、ギクユ人留学生は勉強と仕事の両立に多忙を極めていた。もちろん、彼らにも息抜きや楽しみの時間が必要であり、ケニア人女性が少なかった時代には、女の子が来るたびに歓迎会のパーティーを開いていたという¹²。一方、留学生としてではなく、働くために渡米したギクユ人移民もまた、アメリカでの人生の始まりは苦しかったと語っている。

ケニアでの仕事は不安定で、子供の学費を払うのも難しかったので、2002年にメリーランドへ来た。家族6人をケニアから呼び寄せるまでの3年9ヶ月間、弟の世話になり、8時間シフトの仕事を2つ、ボルチモアの駐車場の管理人とシャトルバス運転手を掛け持ちして16時間も働いた。暑い日も寒い日も、ずっと外にいないといけなかったので、大変だった。ケニアの家族へ送金しつづけ、退職後に住む家もケニアに建てた。家族が渡米する1ヶ月前に中古車を買ったが、翌年には、走行距離が2万マイル(32,000キロ程度)も増えていた。家族の送り迎えに労力を費やしたんだ¹³。家族がアメリカに根付くまで、本当に良

¹² 2000年代に近づく、ケニア人女子留学生も増えてきた。彼女たちは共同生活をしながら、1年間コースで看護師資格が取れるワシントンDCの大学へ交替で運転して通学するなど、協力して生き延びたという。

¹³ 地球一周が4万キロ強であることを考えると、家族を乗せた1年間の走行距離は果てしない。

く働いた（男性・60代）。

私たち家族は、グリーンカードに当たってアメリカに来た。アメリカは天国のような場所だと信じていたけれど、激しいカルチャーショックを受けた。ケニアでは私は、高校教師として社会的にも尊敬されていたのに、アメリカで老人のおむつを替えないといけなかった。そこまで、自分を下げないといけなかった。（石井：頭脳浪費ということでしょうか。）現実との衝撃だ。アメリカに来て14年だが、最初の10年間はずっと大変だった。

けれども、クリスチャンであることが、心の支えになった。おむつを替えている時でさえ、この仕事は自分の通過点に過ぎないと思って耐えた。自分が誰なのか、そしてどこへ行くのかを見失わなかったからこそ、自分の誇りを保てたと思う。人生のゴールは、自分たちと子供たちが学ぶ事だ。ケニアでもできただろうが、時間が長くかかったと思う（女性・50代）。

この女性のように、ケニアで看護師や教師などの仕事に就いていた人が、グリーンカードに当選して渡米した30～50代のケニア人は少なくない。先述したように、ケニアの人々が共有している抜群に良いアメリカのイメージに加えて、入手困難なグリーンカードを得た喜びもあり、十分な計画もないまま来てしまい、大変な苦勞をするのである。前者の男性は、グリーンカードを持たずに渡米し、その後に永住権を獲得したが、それは途方もなく長い大変なプロセスだったという。

こうしたギクユ人移民の労働環境が大変だったであろうことは、容易に想像できるが、一方で、ギクユ人移民の子供たち（1.5世、2世）もまた、渡米当初は学校に馴染めず、疎外感を感じていた様子を語った。

私はアメリカで生まれたが、両親が大学院生だったので、3才から小

学2年生までケニアの祖父母の家で育った。アメリカの小学校に戻った時、白人の生徒が多くて、最初の2年間は友人を作るのも大変だった。ケニア訛りをからかわれた事もあった。仲の良い（白人の）友達もいたけれど、私と喋りたくないという態度のクラスメートがいた。外国人恐怖症があったのだろう。

今はボルチモア市内の高校に通っているのだから、生徒の大半が黒人だ。皆が自分の容姿に似ているから、差別もなく、快適だ。アフリカ人移民の2世も多い（女性・10代）。

10才で家族と一緒に渡米したとき、カルチャーショックは大きかった。ケニアでは、生徒は教師に言い返す事などできず、教師を尊敬する態度があったが、アメリカでは全く異なっていて驚いた。（石井：生徒同士の関係はどうでしたか。）ケニアでは、肩を組みながら友達と歩いたり、じゃれ合ったりした。しかし、こちらでは違う。個人のスペースが大切だと教えられるので、触れ合う機会が少なくなった。ケニアではお弁当を持ち寄って皆で分け合って食べた。誰が誰のものを食べてもいいんだ。しかし、こちらでは自分の弁当は自分だけのものだ。（石井：クラスで差別を感じたことはありましたか）クラスの大半はアフリカ系アメリカ人で、同じ皮膚の色でも、アフリカ人を低く見るような態度があった。ケニアの訛りがあったし、最初の2年間は友達がほとんどできなかった。

ミドル・スクールに通っていた時、通り向かいに住むアフリカ系アメリカ人の女の子と仲良く遊んでいたが、ある時、彼女の母親が警官をよこして、娘とはもう遊んで欲しくないと伝えてきた。それ以来、積極的に友達を作ろうと思わなくなった。子供のころは辛かったが、高校に入ったら、何も気にしなくなった（男性・20代）。

上記の二人のように、ケニアで一定期間を過ごし、アメリカの小学校へ

「ミルクと蜂蜜の国」へ移住するという米国・メリーランド州に住むギクユ人移民の語りの記録

編入した後に、教室や近所の遊び場で疎外感を感じた子供も多かったようだ。ボルチモア郊外で、ケニア人移民の子供を多く受け入れている学童保育のギクユ人経営者は、親たちは仕事や通学で忙しく、子供たちの窮状を知らなかっただろうと述べていた。アメリカ人の輪に溶け込めずに孤立していた子供たちは、周囲に自分の親がケニア出身であると積極的に明かすことも無かったという。さらに、後者の男性は、子供時代にアフリカ系アメリカ人のクラスメートや隣人との付き合いに違和感を感じた様であるが、高校生や大学生へと成長するにつれて、そうしたストレスも次第に薄れていったようだ。

以上、アメリカ・メリーランド州に暮らすギクユ人移民の移住をめぐる当初の思いを素材として提示した。ここで見てきたように、母国の政治・経済的状況が悪化した90年代、彼・彼女たちの多くは、母国での生活に見切りを付けて、「ミルクと蜂蜜の国」でのアメリカン・ドリームを夢見ながら、第一歩を踏み出した。しかし、アメリカという新しい土地で経験したのは、厳しい現実だったことが分かる。ギクユ人移民は、最低賃金での長時間労働や人種差別など、母国の人々が知らない大変な状況に身を投じることになったのである。

今回のフィールドワークで、多忙な移民が筆者に貴重な時間を割いてくれた背景には、移民の子供たちに親の苦勞を伝えて欲しいという第一世代の希望があった。あるギクユ人女性は、「私たちは、本当に遠くから来た。たくさん泣いたし、努力した。子供たちには、今の生活は当たり前のもではなく、両親が努力して作り上げたものだという事を知って欲しい。」と筆者に語っていた。たしかに渡米から20年近くを経て、アメリカ生まれの子供たちも成長してきている今、自分たちのルーツであるケニア人移住史を継承する時期に来ている。

追記：本稿の校正作業をしている最中、第45代アメリカ大統領がトランプ氏に決まった。彼は、アメリカの移民政策に対して強い姿勢を示している

石井 洋子

ため、筆者が出会ったケニア人の中でも、永住権を獲得するのに奮闘している人や、学校に通うために法定時間以上の労働に従事している人などは、さらに大変な状況に陥るのではないかと危惧する。同時に、ケニアからアメリカへ向かう渡航者数も大幅に減少する事が予測され、アフリカの好景気を背景に、アフリカ大陸とアメリカの関係は一つの節目を迎えるのではないかと思う。

なお、本研究は、聖心女子大学・在外研究費（長期・短期）および科学研究費補助金によって実現しました。心より感謝いたします。

参考文献

- 石井洋子 (2016) 「アフリカのパスポート」『パスポート学』（陳天璽ほか編）41～47頁，北海道大学出版会
- Kioko, Maria 2007 “Diaspora in Global Development: First Generation Immigrants from Kenya, Transnational Ties, and Emerging Alternatives.” In Daniel Paracka (eds) Institute for Global Initiatives 2(2) : 151-168.
- 2010. Transnational connections of first generation immigrants from Kenya in USA. PhD dissertation (Rutgers University).
- Odera, Lilian 2010. Kenyan Immigrants in the United States: Acculturation, Coping Strategies, and Mental Health. El Paso: LFB Scholarly Publishing.